

ザビエルとロドリゲス ——16・17世紀イエズス会の言語研究

丸 山 徹

はじめに

本論はザビエル書簡、ロドリゲス文典、バロス文典などの考察を通して、

- ① 大航海時代、「キリシタン版（文献）」という質量ともに世界一の語学書を印刷物の形で世に送り出すに至る力の源はザビエルの中にあったこと
- ② そのザビエルと、後に質の高い日本語文法書を著すことになるロドリゲスの背後には、二人に共通に影響を与えることになる（文法家・歴史家でインディア館の管理運営者でもあった）ジョアン・デ・バロスというポルトガル人がいたであろうこと

の二点について論ずるものである。

1. ザビエルと言語

ザビエルは「あまり語学の才能がなかった」と言われている。たとえば日本におけるキリシタン史研究に大きな貢献をされたチースリク師は次のように述べられる。「ザビエルは、語学の才能はそれほどありませんね。たいへん日本語で苦勞しているということが手紙の中にたびたび出てきます。自分はいま鹿児島にいて、冬の間に日本語を覚えようとしているけれど、まるで赤ん坊のような気がする、回りの人が何をしゃべっているのかちっともわからない、日本語は、布教を妨げるためにわざとむずかしく作られた言葉じゃあないか、と悲鳴を上げていることもあるのです。説経しても、たいていの人は半分しかわからない。あるいは全然わからなかったと思います。だから笑っている人、おかしい日本語をまねする人も多かったのですね。」（H. チースリク「フランシスコ・ザビエル」1984）「日本語は、布教を妨げるためにわざとむずかしく作られた言葉じゃあないか」に該当する表現をザビエル書簡中に確認することはできないが、ザビエルが日本語を習得するのに苦勞したらしいことはその書簡集の中にも窺える。確かに「ザビエルが日本に行った時には言葉を知らなかった。あるいはむし

ろ日本語についての知識をほんの僅かししか持っていなかったか、全く持っていなかったと言ってよいくらいである。そうであるのに、彼は通訳なしに説教したが、どの言葉でもうまく話すことができなかったのも、一部分はスペイン語、一部分はラテン語、一部分はポルトガル語を使い、それに少しの日本語を交えて話した。それ故に、その中のどれか一つの言語で話すよりもすべての聴衆に理解されたのである。」(1616年ゴアにおける報告会)(J. B. Gonfalonierius. Notitiae Historicae et Aeruditae de Natura et Essentia Apostolatus, vol. tertius: De S. F. Xaverii in India atque Japonia Apostolatu libri 8. (Romae 1623) f. 350v. Apud T. Doi 1982) といった報告も残っているようである。

しかしながら一方で「メストレ・フランシスコは行きつくところで、その地の言葉を極めて短時日の間に理解して話した。」(ザビエルの遺骸をマラッカからコチンまで送り届けた船長の1556年マラッカにおける口述)(Monumenta Xaveriana. II. Matriti 1912. 418. Apud T. Doi 1982) というような報告も残っている。またザビエルは自分の母語はバスク語であると語っているし(書簡20)、ザビエルの生まれ育ったところはスペイン語圏で、家僕も領内を通る羊飼いやもスペイン語を話していた(河野1985)ということであるから、きっとザビエルはバスク語・スペイン語のバイリンガルであったのだろう。またザビエル自筆のポルトガル語書簡(書簡51)が残っているものであるから、ポルトガル語もできたのであろう。同書簡では文中にスペイン語・タミル語・ラテン語を混用し、宛名はイタリア語になっているそうだから、こうした言葉も少しはできたのであろう。当時のカトリック宣教師の置かれた状況から考えて、ラテン語ができたことは間違いない。また「私達の言葉を理解するとともに、彼ら自身の言葉をよく知っている人を探しました。その人たちといっしょに幾日もかけ苦勞を重ねて、……ラテン語からマラバル語に訳して、祈禱文をつくりあげました。」(書簡20)との記録も残っているので、ラテン語はもちろん、マラバル語(タミル語・マラーラム語)も少しは理解したのであろう。さらに「(私はマラッカにいた時に)たいへん苦勞して使徒信經をマレー語に抄訳し……」(書簡55)との記録もあるのでマレー語も少しはできたのかもしれない。「私達は天地創造とキリストのご生涯のすべての奥義について(信仰箇条の説明書を)日本語で書きました。」(書簡97)とあるので日本語も少しは理解したのであろう¹⁾。(ザビエルがどこまで関わったかわからないが)仏僧との討論(書簡96他)の記録もある。

結論として、ザビエルはバスク語・スペイン語・ポルトガル語(・イタリア語)そしてラテン語はよくでき、タミル語・マレー語・日本語も少しは理解したが、「語学の才能」はなかった、ということにでもなるのだろうか。ザビエルが日本にいたのはたった二年三箇月、役に立つ語学書も全くなかったことを考えるなら、「語学の才能」というものをどう見るか、またどんな人と比較するのか、ということになるのではないだ

ろうか。確かに世の中には普通では考えられないほど「語学の才能」に恵まれ、役に立つ文法書も何もない所で短時日のうちに現地の言葉を習得してしまう人もいないではない。しかしながら、私の考えるところ、そうした人の方がよほどどうかしているのであって、まともな人は皆、外国語の習得には苦勞するのである。ザビエルは人並みか普通の人以上に「語学の才能」を天から与えられていたと思われる。

2. 「大航海時代の語学書」としての「キリシタン文献」²⁾

ザビエルが来朝した1549年より約100年間の「キリシタン時代」、日本の布教に携ったカトリック宣教師たちは日本語ポルトガル語辞書、日本語文法書、文学書、宗教書などを精力的に編纂した。こうしたキリシタン文献は成立事情や刊行年次がほぼ明らかになっていて、外国語原典との比較もできるものが少なくないので、日本語史研究資料として高い価値を有するとされている。事実、これまで何人もの国語学者がキリシタン文献の研究に携り、数々の成果をあげてきた。

「キリシタン文献」には少なくとも次の三つの角度から光を当ててみる必要がある。

- ① (16・17世紀の)ラテン語・ポルトガル語語学書成立の背景
- ② 同時代のアフリカ・ブラジル・インド、そして日本における(ポルトガル語で書かれた)現地語文法書・辞書成立の背景
- ③ 中世日本語の姿

これまで日本においては主として上記③の観点から研究がすすめられてきたが、こうした語学書が、同時代のヨーロッパにおける語学書の構成に倣って(世界各地の現地語について)書かれているからには、上記①、②の観点を研究に導入することは不可欠である。16・17世紀にイエズス会によってポルトガル語で編纂され印刷形式をとる「語学書」(文法書・辞書・カトリック要理)には、現存するものとして、コンゴ語、ソドongo語(アフリカ)、トゥピ語、キリリ語(ブラジル)、コンカニ語、タミル語(インド)、そして日本語(日本)のものがある。こうした語学書のリスト、またなぜカトリック要理を「語学書」に含めるのか、などについては下記の論を参照されたい。

「大航海時代」の語学書としてのキリシタン文献(南山国文論集17-1993)

Selective Bibliography concerning the Jesuit Mission Press in the sixteenth and seventeenth centuries(南山国文論集20-1996)

ここでは詳論を省くが、日本における「語学書」は他の地区のそれに比べ、印刷年代が古く、数も多く、その質も群を抜いて充実している。なぜ(最後にやって来た)日本における語学書の印刷年代が相対的に古く(つまり他の地区に比べ早くから作られ)、また質量ともに一番充実しているのであろうか。それには以下のようにいくつかの要因が考えられる。

① 日本は（少なくとも都まで）一言語であった。

日本はポルトガル人がそれまで関わってきたアフリカ・ブラジル・インドに比べ、言語数が圧倒的に少なかった。そうした地域では少なくとも数百の異なる言語が話されていたのに対し、日本は（九州から都まで）一言語しか話されていなかった。日葡辞書におけるいわゆる「お国訛」に相当する「郷談」「国郷談」の項にも「（日本には）全国に通ずる（共通）言語がある」旨、記されている。（亀井1971）また日本に関する情報をザビエルに送ったアルヴァレス書簡にも「この国は（都に至るまで）一言語である」と書かれている。そのことはロドリゲスの日本語文法書とアンシエッタのブラジルトゥピ語文法書のタイトルに端的に表されている。前者のタイトルが「日本の言語の文法書」（Arte da Lingoa de Iapam）（写真1）となっているのに対し、後者のそれは「ブラジル沿岸で最もよく話されている言語の文法書」（Arte de Grammatica da Lingoa mais vsada na costa do Brasil）（写真2）となっている。日本は一言語だったからこそ、その語学書が質量共に充実しているのである。ザビエルはそのこと、つまり日本は一言語だから語学書を充実させられること、またそれによって福音宣教がよりうまく進むであろうことに気づいていたに違いない。

② イスラム圏と違って日本では「通訳」（um lingua）がほとんど役に立たなかった。

当時、アフリカ東海岸ソファラ以北のインド洋沿岸はイスラム圏であったと考えられている。そうした各地では、モロー人——主として北アフリカ出身のイスラム教徒——の通訳によってアラビア語を仲介にポルトガル人と現地の人との意



（写真1）



（写真2）

思の疎通がはかられたらしい。しかるにインド洋沿岸の各地と違い、日本ではポルトガル人との間の仲介になる言語がなく、「通訳」は全く役に立たなかった。これは布教にとってマイナスである一方、ザビエルのように日本には「イスラム教徒もユダヤ人もいない」(書簡 70)ので、自由に福音を伝えられると考え、そのプラス面を強調することもできよう。いずれにしても、仲介になる言語が全くない日本では、それだけ懸命に現地語である日本語が勉強されたはずである。

- ③ 日本人は読み書き能力が高く、文書でキリスト教を広めることが可能だった。

「(日本では)住民の大多数は読み書きができるので、印刷の方法により、キリスト教を広めることができる。」(ザビエル書簡 90 他)とするザビエルのことばは、「キリシタン文献」を印刷という形で公にする活動の原点とも言える。

- ④ それまでの口頭による宣教から潜伏宣教へ方針転換の必要が生じた。

キリスト教徒に対する弾圧が激しさを増す中、印刷物による宣教の重要性がより大きくなってきたであろうことは十分考えられる。

- ⑤ 日本では教養人の協力が得られた。

日本では「キリシタン文献」編纂の際、日本人信徒(教養人)の協力が得られたことは間違いなく、そうした中には名前が明らかになっている人たちもいる。しかしここで確認しておきたいのは、むしろそうではない「名もなき」信徒の相当数が編纂に協力したと思われることである。そうでなければ日葡辞書一つとっても、あのような収録語数とその記述のレベルの高さは短時日のうちにとっても確保できなかったであろう。そうした状況(つまり現地で教養人の協力が得られたこと)はアフリカ各地やブラジルとは全く違っていた。インドの語学書が日本のものについて質量ともに充実していることも、心に留めておく必要がある。インドでも文献編纂に際し、現地人の協力が得られたであろうと思われるからである。

- ⑥ (百万塔陀羅尼以来の)印刷の伝統、写本の伝統、よい和紙の存在

日本には百万塔陀羅尼(8世紀)以来の木版印刷の伝統や長い写本の伝統があり、よい和紙が作られていた。印刷に適したよい紙の存在は「キリシタン文献」を印刷の形で公にする時に、欠かせない条件であったろう³⁾。

- ⑦ 「ザビエル精神の継承者」ヴァリニアーノが日本に印刷機^{もたら}を齎し、現地日本で印刷ができたこと

ヴァリニアーノが日本に印刷機^{もたら}を齎したことが、キリシタン版諸文献誕生にとって決定的な出来事であったことは言うまでもない。アフリカ、ブラジルの言語に関する書物が現地ではなくポルトガル本国で印刷されていたことを考えると、日本におけるザビエル、ヴァリニアーノ、そして(ロドリゲス等)後に続く語学書編纂者へと連なる一つの流れを思わずにはいられない。

日本に次いで語学書が質量ともに充実しているインドにも印刷機が^{もたら}齎されていたことを、ここで思い起しておく必要がある⁴⁾。

3. ロドリゲスの品詞論をめぐって⁵⁾

16・17世紀の「大航海時代」イエズス会士によって著されたアフリカ・ブラジル・インド土着語の文法書は、原則としてラテン語八品詞（またはそれより少ない数の品詞）の枠組みで描かれている。しかるにロドリゲスはラテン語八品詞に加え「助辞」(Particula)と「冠詞」(Artigo)という品詞を新たに導入し、十品詞の枠組みで日本語を記述した。ロドリゲスはなぜ「助辞」「冠詞」という新しいカテゴリーを日本語文法の中に持ちこむことができたのだろうか。詳しい議論をここで展開することはできないが、「助辞」については、その背景に、日本人による「てにをは」研究があったであろうと思われる。この点、先程述べた日本人信徒（教養人）の協力、ということをお願いしたい。日本人の協力なしにロドリゲスが独自に「助辞」という概念を文法に盛り込むことができたとはとても思えない。そして「冠詞」については、次のような背景があったと思われる。ロドリゲスは概略、日本語文法で「格助詞」と呼ばれるものを「冠詞」と呼ぶ。現在はもちろん、当時の日本語にも「冠詞」がなかったことは明らかである。何故にロドリゲスは日本語の「格助詞」を「冠詞」と呼んだのか。それを考えるにはこの原語 ARTIGO のその頃の使われ方を見てみる必要がある。まず、次の一節を見てもらいたい。

用語としてわかりにくいのは árthron「冠詞」である。これは本来は「関節」をあらわす語で、アリストテレスはこれを文法用語に転用して、接続詞をふくめた広い概念に使っていた。(風間喜代三「ラテン語とギリシャ語」1998)

ギリシャ語 árthron がラテン語の articulus に、そしてこれがポルトガル語の artigo や英語の article に対応するのは言うまでもないことだが、これらは本来、「繋ぐもの」を意味していたらしい。そしてその語感には、次に見るように、16世紀のポルトガル語文法書の中にも明らかに残っている。

ARTIGO とは品詞の一つで、ラテン語は持っていない。この名はギリシャ語の ARTHON (sic.) から派生したラテン語の ARTICULUS に由来し、我々が今日「関節（足首や足の指）」と呼ぶ「腱を繋いだもの（靱帯の連鎖）」を意味する。そして腱の連鎖が身体を支えるように、名詞の格に付された ARTIGOS が文を構成する。(BARROS (1540) —12 r)

さらに BARROS はそのあと、名詞に倣って以下のような「ARTIGOS の曲用」を示

している。

	男 性		女 性	
	単 数	複 数	単 数	複 数
主 格	O	OS	A	AS
属 格	DO	DOS	DA	DAS
与 格	AO	AOS	À	ÀS
対 格	O	OS	A	AS
呼 格	Ó	Ó	Ó	Ó
奪 格	DO	DAS(sic.)	DA	DAS

ロドリゲスにとっての ARTIGO とは上記のようなもので、現在の文法で言えば前置詞と冠詞の縮約形もそれに含まれるのであった。今、話を簡単にするために、男性形単数の主格、属格、与格のみを例にとって見ていくこととする。

O livro é caro.	→	o livro=本が
(The book is expensive.)		(the book)
a maior cidade do mundo	→	do mundo=de+o mundo=世界の
(the biggest city of the world)		(of+the world)
Vou ao Brasil.	→	ao Brasil=a+o Brasil=ブラジルに
(I go to (the)Brazil.)		(to+the Brazil)

このように見ていくと、主格では冠詞 o (the) に格助詞「が」が、属格では前置詞と冠詞の縮約形 do=de+o (of the) に格助詞「の」が、与格では前置詞と冠詞の縮約形 ao=a+o (to the) に格助詞「に」がそれぞれ対応している。現代の感覚ではこのことをもって「格助詞」を「冠詞」と呼ぶことなどとてもできないが、上述のように少なくともバロスの文法書では、上に示したように前置詞・冠詞の縮約形をも「冠詞」と呼んでいるので、ロドリゲスはその認識をもって日本語の「格助詞」を「冠詞」と呼んだのであろう⁹⁾。いずれにせよ、西洋の文法史上、「冠詞」をどう捉えてきたかについては、まだよくわからないことが多い。ポルトガル語文法史における ARTIGO の様々な扱いについては、以下の論文に詳しい。

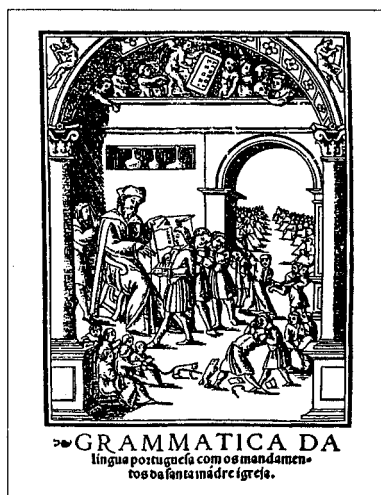
Maria Filomena GONÇALVES. O “artigo” e “as partes do discurso” na antiga gramaticografia portuguesa (Actas do 4 Congresso da Associação Internacional de Lusitanistas—Hamburg, 1993. Lisboa, 1995)

4. ロドリゲスとバロス

ロドリゲスが「格助詞」にあたるものを「冠詞」(ARTIGO)と呼んだ、その背景にはバロス(João de Barros)の手になるポルトガル語文法書(1540)があったであろうと思われることは上述の通りである。バロスと同じく16世紀の文法家であるオリヴェイラも部分的に似たような考え方をしているところもあるが、次に述べるヌネス・ド・リャオンの考え方に近い点もある⁷⁾。同じ16世紀に、現在の研究者のように「AOは前置詞Aと冠詞Oから成る」と明言しているのはNunez do Lião(1576)で⁸⁾、彼はすでに今日の文法論における「冠詞観」に到達していたと言える。しかしロドリゲスは読んでいなかったのではないだろうか。いずれにせよ、バロス、ロドリゲスに共通の「冠詞観」は今日のそれとは異なるものであり、ロドリゲスはそれに基づいて日本語の「格助詞」を「冠詞」と呼んだと考えられる。バロスの文法書がインドまで来ていたことは確かなので⁹⁾、ロドリゲスがこれを読んでいた可能性は十分にある。

ところで、ロドリゲスの「日本教会史」にはバロスの「アジア史」が何度も引かれている。そこでロドリゲスは「あの厳格で誠実な歴史家のジョアン・デ・バーロス」という表現をもってバロスに最大の敬意を表している¹⁰⁾。

5. ザビエルとバロス

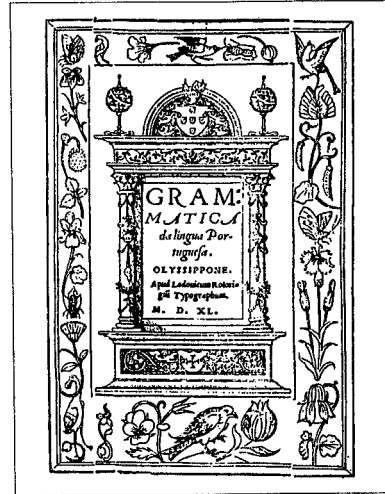


(写真3)

ザビエルはゴア到着後すぐに、持参したバロスの「ポルトガル語文法および聖にして母なる教会の教え」(小冊子)(1539)(写真3)をもとに、インドの実情に合わせて補筆した「短い公教要理」を編纂した。(書簡14)これが後にタミル語、マレー語、日本語などに翻訳されていくことになる。(書簡20・51・52・55・59・90・96)(ただし現存する印刷された形の日本語ドチリナキリシタンはこのザビエル版をもとにしたものではない。)このようにザビエルとバロスの関係も決して浅いものではない。

6. バロス, ザビエル, そしてロドリゲス

- ① ザビエルがバロスの「ポルトガル語文法 および聖にして母なる教会の教え」(小冊子) (1539)をもとに, インドの実情に合わせて補筆した「短い公教要理」を編纂した(書簡14) こと
 - ② ロドリゲスがバロスを「厳格で誠実な歴史家」と呼び, バロスの「アジア史」を何度も「日本教会史」の中に引用していること
 - ③ ロドリゲスがバロスの「ポルトガル語文法」(1540) (写真4) を(部分的にでも)読み, その中の「冠詞観」に基づき日本語の「格助詞」を「冠詞」と呼んだ可能性があること
- 以上三点を確認しておきたい。



(写真4)

7. ジョアン・デ・バロス

バロスは当時も現在も頗る有名なポルトガル人であるが, その生涯についてはあまりはっきりしたことがわからないらしい。彼に関する伝記の類(たとえばCoelho 1997)を読むと, 「おそらく」とか「たぶん」とか「らしい」といった表現によく出くわす。たぶん生年(ano provável do nascimento)は1496年, ヴィゼウ(a cidade mais provável Viseu)で下級貴族の息子として生まれたらしい。幼い頃からマヌエル王の小姓として仕え, 宮廷で教育を受けたようである。早くから(1507年)ジョアン王子(のちのジョアン三世)の近侍(moço de guarda-roupa)となり, ジョアン三世との関係がその後長く続くことになる。1522年には若くして『クラリムンド皇帝年代記』(Primeira parte da cronica do emperador Clarimundo...)を刊行, 世の注目を集めたらしい。同じ年, (前年にマヌエル王の後を継いだジョアン三世によって)アフリカ・ギネア海岸エル・ミナ城のカピタンに任命され, 赴任, 1524年末または1525年はじめくらいまで, そこに勤務した。1525年5月, リスボン・ミナ館の財務官, 続いてインディア館の財務官に, さらに1532年, 同じインディア館の商務官に任命されている。その後いろいろあった後, ジョアン三世の委嘱により(インディア館商務官の地位にありながら)『アジア史』の執筆に取り掛かる。この『アジア史』第一篇が刊

行されるのはずっと後の 1552 年であるが、それまでの間に本文で言及した二つの文法書を含むいくつかの著作を刊行している。1568 年、リベイラ・デ・アルティンに引退、同地で 1570 年の 10 月に死去している。

おわりに

（仮に一步譲って「ザビエルに語学の才能はなかった」としても）大航海時代、「キリシタン版（文献）」という質量ともに世界一の語学書を印刷物の形で世に送り出すに至る力の源はザビエルの中にあったといえる。「印刷」という形での福音宣教を日本で最も早く提言しているのはザビエルである。そしてそのザビエルと、後に質の高い日本語文法書を著すことになるロドリゲスの背後には、二人に共通に影響を与える（文法家・歴史家でインディア館の管理運営者でもあった）ジョアン・デ・バロスというポルトガル人がいたのではないかと思われる。

〈参考〉バロスとザビエルとロドリゲス

BARROS		XAVIER	
1491 年	生まれ		
1522 年	ギネア海岸へ (エル・ミナのカピタン)	1506 年	生まれ
1525 年	インディア館財務官		
1532 年	インディア館商務官		
1539 年	「ポルトガル語文法」(小冊子)	1541 年	リスボン出帆
1540 年	「ポルトガル語文法」	1542 年	インド・ゴア着
		1549 年	日本・鹿児島着
1552 年	「アジア史」第一篇	1552 年	サンチャン島で死去
1570 年	死去		

RODRIGUEZ	
1561 年	生まれ
1577 年	来朝
1580 年	イエズス会入会
1596 年	バードレとなる
1604 年	「日本（大）文典」
1610 年	マカオへ追放
1620 年	「日本小文典」
1633 年	マカオにて死去

〔追記〕 本論第一節は、故チースリク師に異を唱える形をとっている。私は15年以上前にも一度、別のことでチースリク師と意見が食い違い、議論したことがある。そのことを青山玄神父は次のように書き残している。

……丸山氏はロドリゲス『日本語文典』の正書法の分析から、ロドリゲス以外のポルトガル人もこの書の執筆か印刷に関与したのではないか、との結論を出されたが、そういうポルトガル人があり得たかの問題をめぐり、後でチースリク師と議論する一幕もあって、なかなか面白かった。(名古屋キリシタン文化研究会会報 27)

私としては、その時のチースリク師のご意見にはどうしても納得できず、同研究会会報(32)において、師に再反論を試みた。読んでいただけたとは思っていなかったのに、師はきちんと拙論をお読みになり、後日、お心のこもったおたよりをくださった。今でも感謝の念を持って、その時のことを思い出す。師が今いらしたら、本論に対して何とおっしゃってくださったことであろうか。チースリク師のこれまでのご教導に感謝の意を表しつつ、師のご冥福を心よりお祈りする。

注

- 1) ただしこうした書簡における「私達」をどう解釈するか、その中にザビエルを含めるのかどうかの判断は慎重になされねばならない、との忠告をヨリッセン氏よりいただいた。
- 2) この節は一部拙論(1993, 1999)と内容が重複する。
- 3) 百万塔陀羅尼は銅版で印刷されたとの説もある。
- 4) 下記の拙論を参照されたい。

Thomas Stephens とコンカニ語(南山国文論集 23-1999)

- 5) この節は一部拙論(1999)の注 15 と内容が重複する。
- 6) 夙に土井(1976)に次のような指摘がある。「これ(Artigo の命名)はロドリゲスの創意に係るかと思われる。この用語には苦心の跡がうかがわれる。恐らく、ラテン語の転尾に相当するロマンス語の語形を示すのに、冠詞 Artigo を添えた言い方によるので、その事からヒントを得たのであろう。」(p. 497)
- 7) たとえば ao について「与格の冠詞」(artigo de dativo) (Cap. xliii) という表現を一度はしているが、すぐその後で、ao の a は前置詞である旨を述べている。
- 8) 「ao という時の a は前置詞で、o は冠詞である。」(Nunez do Lião (1576) 63 v)
- 9) 拙論(1993)
- 10) 大航海時代叢書「日本教会史」上 p. 178。(ちなみに「パーロス」という表記のほうが原音に近いともいえるが本文では大航海時代叢書「アジア史」の表記に従い「パロス」とする。)

主な参考文献

- バロス「アジア史」1・2（大航海時代叢書 1980, 1981 岩波書店）
- H. チースリク「フランシスコ・ザビエル」（『日本史探訪』1984 角川書店）
- 土井忠生「日本大文典解題」（勉誠社 1976）
- 「十六・七世紀における日本イエズス会布教上の教会用語の問題」（『吉利支丹論攷』1982 三省堂）
- 福井純理「キリシタン版印刷の意義とその背景」（2000年 南山大学大学院提出レポート）
- 亀井孝「こくご」とは いかなる ことば なりや（亀井孝論文集1 1971 吉川弘文館）
- 風間喜代三『ラテン語とギリシャ語』（1998 三省堂）
- 河野純徳『聖フランシスコザビエル全書簡』（1985 平凡社）
- 『聖フランシスコザビエル全生涯』（1988 平凡社）
- 丸山 徹「大航海時代」の語学書としてのキリシタン文献（南山国文論集 17-1993）
- 「Thomas Stephens とコンカニ語」（南山国文論集 23-1999）
- ロドリゲス「日本教会史」上・下（大航海時代叢書 1967, 1970 岩波書店）
- ANCHIETA, Joseph de. (1595) *Arte de Grammatica da Lingoa mais usada na costa do Brasil*. Coimbra: Antonio de Mariz.
- BARROS, João de. (1539) *Grammatica da lingua portuguesa com os mandamentos da santa madre igreja*. Lisboa: Luis Rodrigues.
- (1540) *Grammatica da lingua portuguesa*. Lisboa: Luis Rodrigues.
- (1552) *Asia de Joam de Barros dos fechos que os Portugueses fizeram no descobrimento e conquista dos mares e terras do Oriente*. Lisboa: Germão Galharde. (Segunda Decada 1553, Terceira Decada 1563, Quarta Decada 1615.)
- COELHO, Antonio Borges. *João de Barros — Vida e Obra*. Grupo de Trabalho do Ministério da Educação para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses. 1997.
- GONÇALVES, Maria Filomena. (1995) O “artigo” e “as partes do discurso” na antiga gramaticografia portuguesa (*Actas do 4 Congresso da Associação Internacional de Lusitanistas*—Hamburg, 1993. Lisboa, 1995)
- MARUYAMA, Toru. Selective Bibliography concerning the Jesuit Mission Press in the sixteenth and seventeenth centuries (南山国文論集 20-1996)
- NUNES DO LIAO, Duarte. (1576) *Orthographia da Lingoa Portuguesa*. Lisboa: João de Barreira.
- OLIVEIRA, Fernão d'. (1536) *Grammatica da lingoagem portuguesa*. Lisboa: Germão Galharde.
- RODRIGUEZ, João. (1604-08) *Arte da Lingoa de Iapam...* Nagasaki: Companhia de IESV.
- (1620) *Arte Breve da Lingoa Iapoa...* Amacao: Companhia de IESV.
- (Manuscripts of History of the Church in Japan)
- (Manuscripts of Letters from China)
- STEPHENS, Thomas. (1622) *Doutrina Christam em lingoa Bramana Canarim...* Rachol: Collegio de Rachol da Cõpanhia de IESVS.
- (1640) *Arte da Lingoa Canarim...* Rachol: Collegio de S. Ignacio da Companhia de IESV.

〔付記〕 本論はヨーロッパ研究センターにおける、南山大学創立 50 周年記念・ザビエル渡来 450 周年記念シンポジウム（1999.12.8.）においてパネリストの一人として報告したその内容をまとめなおしたものである。こうした機会をお与え下さったリチャード・ジップルヨーロッパ研究センター長、木下登イスパニア科長、ヨーロッパ研究センター所員・職員の方々、その他関係各位に感謝の意を表する。当日会場においてあるいは後日個人的にコメントをくださった方々にも御礼申し上げる。なお本論は 1999 年度南山大学パッヘ奨励研究 I A の成果の一部でもある。